

CAGLIERO 11

カリエロ11 サレジオ会 宣教ニュース



サレジオ会宣教部門による
サレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの
友人のための通信

N.132 - 2019年12月



この2019年を終えようとする今、私たちは顔と顔を合わせて幼な子イエスと会い、すべてを、すべての人をそのみ前に運びます。小さなイエスは腕を広げ、すべてを迎えます。すべてを抱きしめます。幼な子イエスは、全世界を抱擁します。2019年、私が最も心を揺さぶられた訪問の一つは、若いサレジオの殉教者、アカシュ・パシールの家を訪れた時のことです。アカシュは2015年3月15日、パキスタンのラホールで亡くなりました。30分だけの訪問でしたが、とても濃い、意味深い時間でした。私はアカシュの父、母、兄弟姉妹と共に過ごしました：生き生きとした信仰のキリスト者の家庭で、殉教した息子が以前にも増してのちにあふれ生きていて感じています。それは訪問であり、巡礼でもありました。そう、トリノからラホールへの巡礼、途中数か所に立ち寄りながら、数千キロに及ぶ旅、リュックの中にキリスト者の扶け聖マリアのご像をたずさえて。ご像は、試練にあい、祝福を受けているその家族への総長からの記念の品であり、預言でした。マリアは今日も、殉教者の女王です。そして若者たちは、今も、復活されたイエスに心を奪われます。イエスはすべてを求めます、すべてを与えるから。



殉教者のない2020年を幼な子イエスに願い求めましょう……しかし、キリスト者、サレジアンとしての殉教の精神に満ちた2020年を。

宣教顧問 ギジェルモ・バサニェス神父

ある対話 - 現代の世界で宣教者であることについて

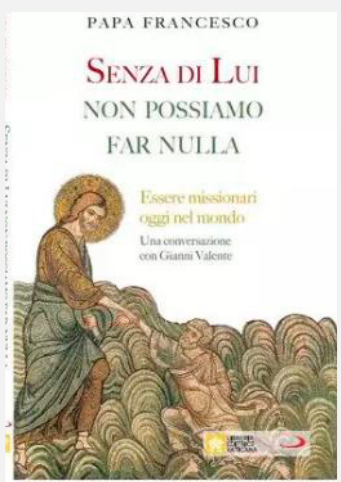
教 皇フランシスコとの生き生きとしたインタビューを収録した新たな本が、2019年10月「福音宣教のための特別月間」閉幕の数日後に出版されました。インタビューを行ったのは、Fides 宣教事務局のジャンニ・ヴァレンテ氏。

その対話全体を通して流れるテーマには、フランシスコがその教えの中で、世界における教会の宣教の使命の特質を定義するために繰り返し用いる多くの表現が見られます。ローマの司教はこの対話で、はじめて立ちどまり、くつろいだ姿勢で語りながら、自分の訴えかけは提案であると説明しています。教会は、改宗の押し売りによってではなく、心をひきつける魅力によって増し加えられること、宣教の主役は聖霊であること、教会はその本質から“外へ出向いていく”ものであると、教皇は訴えています。教皇はまた、これらの表現を単なる耳ざわりのよい教会用語にとどめてしまう危険を取り除きながら語っています。司牧者として働いた思い出の中からイメージや出来事をあげ、あらゆる使徒職にふさわしいダイナミズムとなりうるもの、その源泉となりうるものを提示しています。そのため、この新しい本に収録されている宣教についての教皇の思想は、光を与え、興味をそそり、まばゆく、なぐさめを与えるものとなっています。その訴えかける力は、宣教促進に直接たずさわる人々のためだけではありません。

フランシスコの答えの中で、使徒職は、努力や働きの結果、人生の労働に加えらるるさらなる務めの成果として示されることはありません。あらゆる宣教の運動のダイナミズムは「**愛に心を奪われること**、愛するようにひかれる魅力によって」前進すると、教皇は断言します。「人はコーヒーを飲みながら決めたことでキリストに従うわけではありません。ましてや、そのようにしてキリストとその福音を宣べ伝える者になるわけではありません。宣教へと向かうあらゆる動きは、このひきつける魅力のうちに、それを人に伝えるとき、はじめて実を結びます。」教皇はインタビューの中で、真の使徒職のしるしとなる特徴をあげています。真の使徒職は「物事を前進させ、容易にします。すべての人を擁抱し、すべての人をいやし、すべての人を救おうとするイエスの望みの前に自分たちが立ちあがるようなことをしません。区別を設けたり、“司牧境界検問所”を設けたりしません。ほかの人々が中に入る要件を満たしているかを検査する門番になったりしません。」

教皇はまた、宣教の働きとお金、メディア、グローバル化の流れなどとの関係について示唆に富む考えを示しています。教皇は指摘します。この時代、「隠れた形でありながらも、結局は宣教を何らかのイデオロギーによる植民地化として示すことになるあらゆることを警戒する必要があります」。教皇は、宣教の効果を、マーケティングからコピーしたような戦略や思い上がった神学的方法論にゆだねてしまうような機能主義的誘惑に警鐘を鳴らしています。「速攻、当て逃げ」のようなやり方をする宣教師の現象を教皇は批判します。自分たちの「霊的ツーリズム」を宣教としてごまかし、使徒職を茶番化していると。教皇は次のように説明しています。「イエスに従い、福音を宣べ伝えるには、自分自身を、自分中心のものを見方を後にするのです。そしてまた、主が私たちを連れて行かれる場所や状況に「住む」、留まることも必要になります。」

福音宣教とは、「あたかも職業であるかのように宣教の働きをすることではなく、他者と共に生きること、人々がいるところに留まること、共に歩みたいと望むこと、その人々のペースで歩むことを学ぶことです」。教皇は述べています。行事の開催や計画的な動員による働きではなく、織りなされる日々の生活の中で、はじめて宣教の働きは「実を結びます。そして、そのようにしてはじめて、日々の生活の歩みの中で、多様な現実において、福音の真実な文化内開花のプロセスが実現されるのです。福音の文化内開花は神学の実験室ではなく、日常生活の中で実現するのです。」



ドン・ボスコの精神が 人々の心を奪うのを見て、幸せです

会

私はスロバキアのサレジオ会の本部修道院のあるサスティンに近い小さな村、ククロフで育ちました。そこには国民的巡礼地である悲しみのおとめマリア大聖堂があります。私は12歳のとき、初めてサレジオ会員に出会いました。しかし、その時は、その人たちがサレジオ会員だとは知りませんでした。まだ共産政権の時代で、すべての修道会が禁止されていたからです。教会で若者のための活動や集いをするのは少々危険でしたが、私たちの主任司祭は勇気がありました。主任司祭はサレジオ会員たちをよく知っていました。福者ティトゥス・ゼマンに案内されて国境を越えようとして捕まったとき、何人かのサレジオ会員と共に投獄されていたのです。10年の獄中生活と6年の社会奉仕の後、主任司祭は、私たちの教会で司祭として働く許可を得ました。そして、私たちの村を訪ね、集いやさまざまな活動を行いたいというサレジオ会の申し出

を受け入れました。ベルリンの壁が崩れたとき、自由時間を私たちのためにささげてくれていた若い二人の働き手がサレジオ会員であることを、私たちは知りました。二人は、宣教地のことも私たちに話してくれました。しかし、宣教師になるという考えが頭に浮かんだのは、私が15歳のときでした。ヨーゼフ・ダニエル・ブラウダ神父が私たちの教会を訪れたのです。ブラウダ神父は15年以上働いていたコンゴ(当時はザイール)の宣教地から戻り、自分の体験を私たちと分かち合ってくれました。ブラウダ神父のこの言葉をおぼえています：「宣教師になりたい人がいるなら、今、人に仕えることによってその歩みを始めなければならない。」

私はサレジオの養成に入りました。宣教師の召命はまだやや遠くに感じていました。宣教師になるには優れた能力がなければならないと思っていて、その意味で自分には力がないと感じていたのです。それから少しずつ、サレジオ会生活の体験を積みながら、自分の能力ではなく、神に信頼することが重要なのだと理解し始めました。もう一つ、強く背中を押してくれたのは、アンゴラの宣教師、ドン・ミラン・ゼドニツェクの訪問でした。ゼドニツェク神父は、若い司祭となった私が所属するバンスカ・ピストリツァの共同体を訪れました。私の心を打ったのは、ゼドニツェク神父の深い喜びと幸せそうな姿でした。自分が宣教地へ赴くという考えが、より頻繁に頭に浮かぶようになりました。そのことを管区長にも話し始めました。管区長は、識別のために祈るようにと勧めました。それから管区長は、私をオラヴァ地方にある共同体へ送りました。そこは、サレジオ家族のうちに非常に力強い宣教の精神の感じられるところでした。そこには、シベリアで宣教活動を体験した多くのボランティアがいて、過去5年の間に、3人のサレジオ会員がこの共同体から宣教地へ赴いていました。2013年4月、ドン・ボスコの聖遺物がやって来たとき、私はドン・ボスコの前で祈り、答えを聞きました：「なぜまだ待っているのか?」そして2014年6月、管区長は、最初の宣教体験をさせるため、シベリアのヤクーツクの共同体に私を2か月の期間、派遣しました。

2015年7月以来、私はヤクーツクにいます。この宣教地で働くことができるとても幸せです。非常に厳しい気候の土地ですが(冬、気温は時に零下50度にまで下がります)、私にとっては、新たな人間関係に慣れるほうが大変です。カトリック信徒が少ししかいないのです。サレジオの共同体生活が十分にできないことも辛かったです。はじめは二人だけだったからです。しかし状況は変わりました。新たな兄弟会員が到着したときの喜びは大きなものでした。また、地元の人々がカトリックでないにもかかわらず、ドン・ボスコの精神がその心を奪うのを見るとうれしくなります。宣教師にとって、神とキリスト者の助け聖マリアに信頼することはとても大切であると私は思っています。喜びといのちに満ちたイエス・キリストという方と出会えるよう、人々を助ける道具となるためです。

シベリア・サハ共和国(ヤクーツク)の宣教師 **ピョートル・ロレンツ**

サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 **ピエルルイジ・カメローニ** 神父

神の僕**イグナチオ・ストックリー**(1869 - 1953)。今年の12月14日は神の僕の150回目の誕生日。生涯の大部分、責任ある役割を務めた：財務、副院長兼財務、副院長、院長、管区長。チェコ共和国からイタリア、スロベニアからスロバキアに至るまで、人々から「生ける会憲」、ドン・ボスコの精神の効果的なあかし人と目された。「イグナチオ・ストックリーは「会憲」を書いたのではなく、「会憲」に従った修道者であった。」チェコ共和国では今も、「第二のヨハネ・マリア・ヴィアンネ」、「ホヘミアのドン・ボスコ」として人々に記憶されている。



サレジオ会の宣教の意向

現代の若者のために

世界中の若者が、一人ひとりへの神の夢を実現できますように。

2018年、若者のためのシノドス「若者、信仰そして召命の識別」が開催されました。

主が私たちにゆだねてくださった若者たちの人生と夢のため、

世界中の私たちのすべての現場が、
意味深い働きをすることができるよう願います。

Cagliari 11 (カリエロ11)の全バックナンバー：<http://salesians.jp/library/cariero>

